

2023 年 9 月 1 日(金)

2023 年、私にとっての夏の課題図書

毎年報告しているように、夏に私自身に課している課題：「戦争に関する文献を読む」ですが、都合により取りやめた海外(アフリカ)旅行に代わって今年は次の 7 点を読破しました。各書の内容紹介のため多少長くなりますが、ご容赦ください。

1) 太平洋戦争研究会(2023)『写真が語る銃後の暮らし』ちくま新書, 352 頁。

満州事変から敗戦までのいわゆる「十五年戦争」について 350 点にも及ぶ写真を用いて、事件や世相、人々の生活を振り返った資料作品です。特に印象的な写真は、瓦礫と化した丸の内の廃墟に残る金庫、さらに、教科書や資料集でも掲載されている、皇居前で土下座して玉音放送を聞く人々、1945 年 8 月 30 日厚木空港に降り立ったマッカーサーの 2 枚の写真は忘れられない写真です。何度見ても、写真には撮っていない、背後にある当時の日本全体の時代までを描き出しているように感じます。改めて写真という世相を切り取った表現力に圧倒されます。

2) 若林 宣(2023)『B-29 の昭和史 —爆撃機と空襲をめぐる日本の近現代史』ちくま新書, 320 頁。

誰もが知っている爆撃機 B-29 について戦中・戦後における同機のイメージ変化を歌謡曲や小説などを引用しながら説明したユニークな作品です。これまで B-29 による日本各地の空襲被害と犠牲については数多くの記述作品がありますが、一つの航空機に限定して機体開発から戦争で果たした功罪を新しいアプローチによって俯瞰したものです。1949 年 6 月 16 日、中国の成都から飛来した 47 機のスーパーフォートレス(時空の要塞)による北九州への爆撃から、同年 8 月のサイパン、テニアンなどのマリアナ諸島陥落後は焼夷弾を用いた本格的な無差別爆撃までを描いています。ただ、最終章では野坂 昭如さんの著名な作品『火垂るの墓』を手がかりに、一部にあるという B-29 という機体のデザイン的「機能美」という視点について批判をも下しています。

3) NHK スペシャル取材班(2023)『旋律の記録 インパール』岩波書店,292 頁。

2017年にNHKで組まれたドキュメンタリー映像を書籍化した作品です。インドとミャンマーの国境地帯をなす2000mを越える山々から流れ出た大河で作る山岳地帯において、今から78年前に日本軍が、インドにあったイギリス軍の拠点；インパールの攻略を目指した戦いと、その後の敗走。未だに全貌が明らかになっていない無謀なインパール作戦について新資料と新証言で全貌に迫ります。3万とも言われる将兵が命を落とした歴史的な敗北について、戦場で何があったのかに迫った力作です。いち早く前線を離脱した上層部に対し、死者の6割が敗走中の餓死や病死、現場で起きた光景について真実に迫ります。

4) 深緑 野分(2022)『ベルリンは晴れているか』ちくま文庫, 537 頁。

次は少し雰囲気を変えて戦争に係わる小説を2冊選びました。いろいろと悩んだ末に今年にはベルリンを舞台としたフィクションです。深緑さんふかみどりと言えば『戦争とコックたち』(2015, 東京創元社)で一躍人気となった方ですが、本書でもここかしこに食材を扱い作者の本領を発揮しています。敗戦後の連合軍4か国による分割統治下のベルリンで、巻頭に地図・巻末には参考資料一覧も掲載されており、フィクションでありながらも綿密な調査に基づいたリアリティを追求した内容となっています。現地で起きる事件の数々を時代背景と共に味わうことのできる奥深い作品です。

5) 宮内 悠介(2022)『遠い国でひょんと死ぬるや』祥伝社文庫, 424 頁。

「ぼくは、ぼくの手で、戦争を、ぼくの戦争がかきたい…」そう書き残し、激戦地ルソン島で戦死した詩人：竹内 浩三さんの足跡を追ったフィクション。テレビディレクターの職を捨てて単身フィリピンに渡った主人公の須藤は、竹内の足跡を追いますが、そこで待ち受けていたのは、山下財宝、山岳民族、イスラム独立闘争など次々に起こる展開予測不能の事件が登場する冒険小説。第70回芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞作です。

なお竹内 浩三さんは私の好きな詩人の一人で全集をたまに読み返しています(竹内 浩三、小林 察(2003)『戦死やあわれ』岩波現代文庫)。

最後は漫画を2冊。

6) 水木 しげる(2022)『総員玉砕せよ！ 新装完全版』講談社文庫, 398 頁。

この文庫は敢えて紹介するまでもない有名な作品ですが、1993年発刊の初版本に加筆修正した新装完全版です。先の本ブログでも紹介した「水木しげる 魂の展覧会」に触発されて再読した作品です。水木さんが従軍したニューブリテン島での実体験に基づいた貴重な作品で、旧日本軍という組織の持つ矛盾、生命へのこだわりを描いた忘れられない作品です。

7) 武田 一義,平塚 柁緒(太平洋戦争研究会)(2023)『ペリリュー -外伝- 2』(ヤングアニマルコミックス)白泉社, 192 頁。

現在のパラオ共和国に所属する激戦地ペリリュー島を扱った13巻からなるシリーズ漫画の外伝 **side story**。パラオと言えば、第一次世界大戦後に日本の委任統治領となり、南洋庁が設置された場所。当時は、カツオ漁やさとうきび。パイナップル栽培など南洋開発の中心地だった島嶼です。太平洋戦争末期には、本土防衛の前線基地として日本軍守備隊が玉砕した島であり、アメリカ軍との激戦で両軍および島民に数多くの犠牲者を出しました。その様子を、ほのぼのとしたタッチで描いた作品で、その表現が一層、読者に衝撃を与えます。

なお、いずれパラオ諸島も本校のスタディツアーに加えたいとも考えています。

校長 石飛 一吉